

行している。従前は十二月十五日と二十五日（新米ができた頃）であったが、終戦後前記のように改正された。この両日は早朝七時に免田（約一反歩宛）を耕作した番帳の戸主が、お供えの赤飯（約二俵の餅米）を蒸してお宮に運ぶ。これを全村落の老若男女全員が参詣して神酒を戴き赤飯の供饌を食べ、豊年を感謝し家内の安全を祈願する。当日の昼は番帳の家で戸主全員が集合し、規約によるご馳走に加えて芸者も加わって賑やかな祝宴が開かれる。夕刻には小中学生の子供たちにも供饌が渡されたり、夜は青年仲間公民館で祝饌が供されて、この一日は全住民挙げて祭礼気分と親善融和の佳き日となる。特に祭礼前夜のお当夜には、小中学校の男児等がお宮の参籠にこもり遅くまで住民の参拝を待ち、甘藷（菓子・蜜柑）とお茶を接待する風習が続いている。この頃は寒気が襲って小雪ともなるが、広い神苑に焚火をたいて暖をとると共に神への感謝と豊年を祈るのである。

年中行事の一つに正月五日定例的な大般若会がある。この八幡神社の社殿に老若男女の氏子が相集って、家内安全と災害免除の祈禱をする。祭主は区長（連絡員）が当たり、栄蔵寺と慶閭寺（本庄町）の住職が般若経六〇巻を奏上する。祈禱札は各家庭に祀りまた村境にも立てて邪神悪霊の進入を防ぐのである。その昼は全戸主が公民館に集合して、神酒を戴き一年間の村落安全と親善親睦の新春宴会を催すのである。

この村でも子供たちの年間行事や遊びごとは、ほんげんぎょう・土龍打ち・凧揚げ・竹足・独楽・べちゃ・ねん棒等があり、女子では毬つき・お手玉・草輪つき・羽子板等その他動物を相手に、とんぼ釣り・ぼんのう挿し、洞受け（鮎とりかご）泥鰌受け・投針等楽しいものが多かった。今日では大分減ったが、二〇数年前までは童大將を中心に、こうした遊戯や行事に熱中し日の暮れるまで打ち興じたものである。

一一一 田 中

田中は東与賀町の北部で下古賀と下飯盛の中間に位置しており、近世初年の干拓村。正保絵図に村名が見え、貞享四年（一六八七年）の郷村帳にも田中村の小字に「上古賀・新村」と記されている。現在の世帯数二六一昔は農家ばかりだったが、今日では専業農家は僅か数戸に過ぎない。農家に代わって公務員・会社員・電気業・商店・寺院等多種目産業の村落である。

この村の成立について明確な資料は無いが、現在の公民館所在地―天神宮付近は、その昔「慶徳庵」と称する寺院があった。古老の故雪竹平吾の説に依ると、この付近に大鳥居と寺門の二つがあったらしい。「慶徳庵」は佐賀市本庄町鹿の子慶閭寺の末寺で、四代目の禪師が宝永六年（一七〇九年）これを創建したという記録が残っている。庵の広さも五畝二六歩もあり、その側に建っていた天満宮も立派な形態を備えていたという。

この慶徳庵を中心にして当時は土地が高く、村落の南部は低くその高



天 満 宮 ・ 境 内

低の差は一メートル以上もあって、村の南部を東西に流れる堀がその境界となっている。去る昭和二十八年の集中豪雨で本町は大被害を被ったが、この時堀の南部の家屋はどこも水深二・三メートルも水浸しになったが、北側の住宅辺り僅かに床下浸水で難をのがれたのである。この高低の差がある事は、昔より山あり岡ありの証左で楠をはじめどんぐり・櫟等の大樹や竹藪が生い繁り、現在でも森や林の多いことが特徴である。

この村の中央の堀に囲まれた島の中に「郷倉」があった。これも伝承に依れば「郷倉の倉番」となる者は、士族の中で二男か三男坊に限られて命令され懸命に守り続けたという。当時この倉番には鍋島村から雪竹、北川副村から木原、本庄村から重松等ここに移住し、報酬も五石五斗の郷倉番給を貰っていたらしい。かくてこの付近にその分家ができたり、新宅も建築されて漸次拡大したのである。

村落の南部を流れる堀を利用して、昔は広い馬洗い場があった。今次の圃場整備で跡かたもなく撤去されたが、各家に飼育していた水田用の耕馬をここで洗ってやる言わば飼馬の冷水浴場であった。農家では最も貴重な飼馬であるから、馬脚が泥中にねり込まぬよう、そしてけがのないように水底は全部を石材でなければならぬ。そのため慶徳庵付近にあった古い石塔や敷石を並べ敷いて立派な馬洗い場を完成したという。ところが今回の圃場整備で堀をさらえたところ、土葬時代の人骨や葬具類等が数多く掘り出され、往時の墓地だった事が分かった。

この村落の最北端に、浄土真宗本願寺に属する古刹の光徳寺がある。山号を富永山と称し開基は了玄法師で、創立は慶長十九年正月二十六日（一六一四年）である。本堂は先に火災に遭って全焼したが、大正十四年庫裡と共に再建された。光徳寺住職は「松橋」の姓であるが、その沿革と共に「仏閣」光徳寺の欄に記述している。

この邑も戦時中は他村と同様に、人海作戦で共同田植えに励み共同炊事や育児にもはまって、戦争完遂のため懸命に努力した。しかし悲しい敗戦を迎え多数の戦病死者を出し思えば断腸の極みである。

田中地区に関連して東与賀村営による火葬場と避病院があった。火葬場は光徳寺の西方約一〇〇メートル近くに在って、昔はここで死者の火葬をしたが民家に余りに近接している事で現在の場所に移転された。避病院は故山田八郎村長の時代にこの村の西南部に新築され、現在は一住宅となっている。大正・昭和の戦前の頃は毎年夏期ともなれば、赤痢・チフス等の伝染病が流行して、ひどい時には病室は満員となり佐賀市大井樋の避病院へまで患者を運び込んだ事もあった。戦後は飲食品衛生の普及と医学の進歩のために、伝染病もほとんど絶滅した。したがってこの避病院も昭和四十一年六月に閉鎖され、昔の遺跡となっている。

一三 作 出

作出は東与賀町の中央よりやや南に位置して南北に細長く、北は町役場や農協等の敷地をも包含し、南は東西に走る町道を狭んで新村に連なっている。現在の世帯数は一二七で本町内では大村落の一つに数えられている。

昔は「作土井」—という名称で呼ばれていたが、今は「作出」に改名された。この村の西部にある住吉の「裏土井」が、この邑の中央を東へ連なっている土井を「作土井」と言うことから、この名称が生まれたことは間違